

HOPE

希望

([公開プロジェクトのウェブサイトより](#))

何ヶ月か前、ある早朝の日が昇る前に、私はとてもはっきりした夢を見た。

ひとつの考えが、何度も何度も繰り返し私の心に入ってきて、穏やかに言う：

“希望を持とう、そうすれば私たちは生きられる...”

この考えが繰り返し起きたとき、私の前に幾つかのはっきりした光景が現れた：

最初、私はアフリカの荒れ果てた村にいた。明らかに貧困の中にあり、生きていくために必要な何もかもが欠乏していた。十歳くらいの子供が一人、この荒涼とした近寄りがない風景の中をさまよっていた。とても飢え、腕の中にはもっと小さな死んでゆく子供を抱いている。そのとき、声がこう言っていた： 希望を持とう、そうすれば私たちは生きられる... 私は涙を流した。この子供の魂の内にある一閃^(ひとひらめき)の希望が、そしてそれだけが、彼に生きる力を与えているのを見たからだ。苦難の中、あらゆる困難にもかかわらず、希望という生きる力だけが、その子供をささえていた。

それから私は、子供時代の自分を見た - どうやって生き延びればよいのか、また前に進んで行けばよいのかが分からず、ときには絶望し、孤独だった自分を。そのとき、この考えが繰り返されていた： 希望を持とう、そうすれば私たちは生きられる...

私は理解した。このようなときに私にあったのは、本当にこれだけであったことを： 私の魂の襞のどこかにあった一閃^(ひとひらめき)の希望、私を生き続けさせたもの - 今日に至るまでも。それが希望だったのだ。

次に私は、今この地球上に住んでいるすべての人々を見た。大きな変化、多くの難問、多大な困難の中でこの時代を生きている人々を。そのときまた、このただ一つの考えが繰り返されていた： 希望を持とう、そうすれば私たちは生きられる... 私は理解した。これこそが私たちのすべてが持たなければならない、不可欠の資質であると： 希望、それは人類に約束されたことを実現するために、私たちをともに前進させる力なのだ。

私たちは希望だけでは生きられないが、確かに希望なしに生きていくことはできない。だから、これから地球での生き方に起きる試練、変化、転換の日々の中で、内なる自分に耳を傾け、このことを決して忘れないことだ： 希望を持とう、そうすれば私たちは生きられる...

スティーブン・M・グリア 医師
2009年10月29日

(訳： 廣瀬 保雄)